

## 住民みんなで議論・決定

最初の「平和のサンクチュアリ」の設立以来、「平和のサンクチュアリ」や「ピース・ゾーン」では、いかなる武装グループ(AFPとMILF)による住民への残虐行為も記録されていない。さらに2つの武装勢力の間には戦闘の小康状態が見られ、故郷や農場に再び落ち着きたいと願う人々の自信の回復を促した。

さらに、地域住民の姿勢に重要な変化をもたらした。地域内協議活動に参加する人の数が劇的に増した。地域の問題や心配事は住民みんなで議論、決定され、住民のリーダーたちは協議の司会進行を担った。「平和のサンクチュアリ」は、平和な地域づくりへの多数の参加と関与に示されるように、集団主義の精神の育成を促した。

## 宗教を超えた連帯と協力

「平和のサンクチュアリ」が成功した理由として、特筆すべきは、被災住民、平和活動家、地元行政機関の三者のパートナーシップである。この協力関係は、政府軍とMILFの停戦を保証する上で決定的に重要であった。平和な暮らしがしたい、そして住んでいる地域から武力紛争をなくしたいという、

被災地域住民の熱意と強い願いが、この取組みの強固な基盤となった。最後に、武力紛争で被災したキリスト教徒、イスラム教徒およびルマド族によって相互に支援が行われていることは、このプロジェクトの成功を約束する最大の要因の一つだ。

宗教の違いを越えた連帯と協力による仕事は継続する、そして、最も困難な時でさえもそれは効果的である、ということを示す。なぜなら、異なる信仰を持つ3つの集団が、平和へのビジョンを共有し、共に責任ある取組みを行うからだ。

## 平和とは戦争の不在に止まらない 人権の尊重される社会。

ピース・ゾーンとは、1区画の近隣地域から州までのさまざまな規模の地理的空間で、住民自らが、戦争やその他のあらゆる武力を伴う敵対行為を禁止すると宣言した地域である。その地域を武装勢力のピース・ゾーンにすることは勝ち取るべき目標であって、平和だからピース・ゾーンとしたわけではない。

ピース・ゾーンは、地域住民の平和構築に対する責任ある取組みの持続的で創造的な表現によって維持、強化されます(ギャストン・



11月署名開始の小田原市の皆さん

・オルティガス平和研究所、「平和ゾーン入門」参照)。

現在の「平和のサンクチュアリ」などの取組みは、避難所に逃れた被災者の故郷に戻りたいという願いに対する、緊急かつ人道的な対応として始まった。しかし、被災者の救援活動は必要なものではあっても、それだけではまったく不十分である。救援活動は、最終的には平和と復興のプログラムへと転換することが必要である。戦争被災者の立場から権限ある地域住民へと人々が真に進歩するために、このプログラムはまた、発達の的なアプローチをとる必要があることもわかっていった。

平和の構築とは、人々の発達をも含んでいなければならないという、より大きな認識の一環でもあった。平和とは、結局、戦争の不在にとどまるものではない。平和

とは、各人が真に尊い人間としての存在を享受しつつ共存できる、そんな生活条件を意味している。

## ピースゾーンの拡大と平和構築 へのためみない旅路

これらの団体や運動がどれほど強くなるうとも、実現した地域の数が限られたもので、ほんの一部の地域でのみ取り組まれているのであれば、ミンダナオ全体への影響はきわめて小さいものにとどまる。それでも確かに、ミクロのレベル、つまり、当該地域住民に限っては変化をもたらす。しかし、現在の状況下で必要とされているのは、これらの取組みが広がって、島中の紛争地域に波及することである。

「平和のサンクチュアリ」での生活は平和構築に向けたためみない旅路である。

その課題は、人々の責任ある取組みを堅持することです。平和構築のプロセスは常に骨の折れる、また終わりのない仕事である。対話と主体的取組みを途切れることなく持続しなければならぬ。

平和構築努力の核になっているのは、互いに手を差し伸べ合い、心の中の希望の声を耳を澄まし、正義と発展への夢をつむぐ人々なのである。